

学級に関する変革の研究(12)

-学級を規定する物理的諸条件について-

1 問題の所在

-物理的諸条件と心理的距離との関係-

谷 口 仙 三 郎
深 見 公 栄大阪市立生野工業高等学校
大阪市立西生野小学校

バーカー, R. G. と ライト, H. F. はアメリカとイギリスの所にある公的場面の数を調査し、それがパーソナリティー形成におよぼす影響について生態学的環境を論じている。ここでアメリカの公的場面の数の多いことを指摘し、人々がその場面で接触する数の多さや、その場面で役割と演じるチャンスの多さが、アメリカ人と積極的、社交的、かつ機智に富み、希望に満ちさせているということを説明している。

われわれは以上の公的場面を学級場面に置きかえ、学級内における物理的諸条件の充実程度に注目した。もし施設なり教員なりが他より多く整備されていると、学習活動なり教科外活動で、児童の活動をより積極的に促進する作用をもたらしているのではないか。また逆の場合それも消極的なものにしていないのではないかと考えた。

しかし、児童の生活や具体的行動におよぼす物理的諸条件を重視するあまり、教師-児童間の心理的距離について無視することは好ましくない。それはたとえ物理的諸条件が満たされなくても教師の配慮によつては、その心理的距離が短縮され、活動や行動が一層望ましくなる場合もある。

今回の研究方向を要約すれば、つぎの3点になる。

1. 児童の教科外活動や具体的対人行動に影響をおよぼす物理的諸条件、あるいは環境条件についての検討。(山田・長井・吉川の項)
2. 児童の教科活動や学習意欲に影響をおよぼす物理的諸条件、あるいは環境条件についての検討。(今野・新村・片倉の項)
3. 物理的諸条件と心理的距離との関係につい

ての検討。両者の関連性に注目しながら、心理的距離の短縮により、児童の心理的反応によりよい効果を見出していきたい。そこで

a. 心理的距離の得点を独立変数とし、その距離の近いものと遠いもの(児童が教師との関係と評価したもの)に類別し、地域性、学年別、男女比、教師の性別、年令別、経験年数から検討する。

b. 「友だちと遊ぶとき」と「先生が休んだとき」について、47年度の調査結果(N=200)にもとづいた因子分析的な考察により、物理的諸条件との関係を知る。

c. 心理的距離の得点をbと同じ資料にもとづいて上位群と下位群とに分けた上、これを独立変数とし、「友だちと遊ぶとき」と「先生が休んだとき」の合計40項目について、これを従属変数とする。そしてそれぞれの項目ごとに有意差の有無ならびにパラメーターを比較して考察する。仮説としては

仮説1: 居住地域と学年との相違による心理的距離得点のグラフにはある程度差があるだろう。

仮説2: 心理的距離得点と「友だちと遊ぶとき」については 居住地域と学年との相違による学級ごとの差はあまりないだろう。

仮説3: 心理的距離得点と「先生が休んだとき」については学級ごとに差があり、教師の資質と深い関連があるだろう。

仮説4: 心理的距離得点の上位群と下位群との区分で「友だちと遊ぶとき」の項目での差は少なく、「先生が休んだとき」ではある程度差があるだろう。

なお 調査結果についての詳細は当日配布する報告資料集を参照されたい。